

織田作之助「アド・バルーン」論

——十吉の語りと「惜愛」——

樋口彩乃

はじめに

「アド・バルーン」は、主人公である長藤十吉の語りによって構成されている。彼の語りは自身の誕生時から始まり、昭和十六年八月の「今」の自分を語ることで締めくくられる。その思い出語りの中では、彼の目から見た大阪の町並みや、そこで出会う多くの登場人物などが精細に語られている。

この作品は昭和二十一年三月、「新文学」¹に発表された。執筆は発表の約一年前に行われており、このことは初刊「世相」²の「あとがき」における、「アド・バルーン」は昭和二十年三月、大阪が焼けた直後、大阪惜愛の意味で、空襲警報下に、こつこつと書いた作」という織田の言葉からも確認ができる。織田と交流があった青山光二は、この「大阪惜愛」という言葉を引用しながら、「いまのうちに大阪を書きのこしておこうという、大阪惜愛の悲壮なまでの気持がうかがわれ、なみなみならぬ執着といわず

さで書かれた、さながら散文詩である」と「アド・バルーン」を評価している。しかしながら、青山の言及は、「あとがき」を初めとするような織田の視点を重視した「大阪惜愛」の解釈にとどまっており、登場人物について深く触れるには及んでいない。他の先行研究を確認しても、織田の執筆背景や文体に着目した言及³はあるものの、作品独自の表現や登場人物について深く掘り下げた言及は見受けられない。なお、青山も引用した「大阪惜愛」という織田の言葉が、作品内でそのまま用いられることはない。しかし、幼少期に訪れた道頓堀の夜店を思い出す十吉の語りから「大阪惜愛」と類似する言葉を確認することができる。

その時のことを、少し詳しく語ってみませう。といふのも、その時みた夜の世界が私の一生に少しは影響したからですが、一つには何といつても私には大阪の町町がなつかしい、今となつてみれば一層なつかしい、惜愛の気持といつてもよくいくらるだからです。⁶

確かにここで見られる「惜愛」という言葉は、織田が「あとがき」で用いた「大阪惜愛」と一致するかもしれない。しかしながら、先の引用部分と織田との間には長藤十吉という語り手が介在していることを見落としてはならない。十吉という人物が自分の生い立ちや過去の思い出話を織り交ぜて語る中で、「惜愛」は登場しているのである。よって、作品に描かれているのは、青山の指摘する「いまのうちに大阪を書きのこしておこうという、大阪惜愛の悲壮なまでの気持」、言い換えるならば「あとがき」に記された織田の「大阪惜愛」の代弁だけにとどまらないのではない。本稿では、語り手である十吉の語りや行動に着目し、語りにおける描写の変化を踏まえながら、彼の口から語られる「惜愛」とはどのようなものかを探る。その上で、十吉が「今」、自分の過去を語る意義を明らかにしていく。

一 大阪の変化

先に引用した初刊「あとがき」における「アド・バルーン」に関する言及は、以下のように統括している。

当時私は今のうちに大阪を書き残して置かうといふ、やや悲壮な気持で、この作には一字一句打ち込んで来たが、読みかへしてみれば、さすがに空襲下らしいまづしさもあるやうだ。

この「今のうちに大阪を書き残して置かう」という織田の言葉は何を示すのであろうか。「あとがき」や、初出末尾に記された摺筆と考えられる時期の記述を見ると、織田は「アド・バルーン」を昭和二十年三月から六月十日にかけて執筆したようである。また、「あとがき」に「大阪が焼けた直後」とあるが、これは昭和二十年三月十三日に大阪を襲った大空襲を指すと考えられる。当時の「朝日新聞」には、「昨三月十三日二十三時三十分頃より約三時間に亘りB29約九十機大阪地区に来襲、雲上より盲爆せり」との大本営発表が記されている。「大阪市の歴史」によると、実際にはB29二百七十四機が来襲し、この大空襲によって「死者三九八七人、罹災者五〇万一五七八人」の被害が出たとされる。その後、作品摺筆時期の昭和二十年六月十日までに大阪では二回の大空襲があった。この当時、大阪に住んでいた織田にとって、大阪大空襲はきわめて身近な出来事であったと考えられる。大谷晃一は「織田作之助——生き愛し書いた」の中で、当時の織田が「アド・バルーン」を書くことによって「亡び行く大阪」を書き残そうとした¹⁵と述べている。この「亡び行く大阪」とは、大阪大空襲などの戦争の影響や時代変遷によって変化する大阪の状況を示すと考える。つまり、「亡び行く大阪」の様子が、織田を「アド・バルーン」執筆へ向かわせた一因となったのである。以降、本稿では「亡び行く大阪」を、戦争や時代変遷によって実際に起きた大阪の変化を表す語として用いる。

「亡び行く大阪」の様子は、織田の「あとがき」からだけでなく、作品内からも読み取ることが可能である。作品タイトルになっているアド・バルーン（軽気球）に着目すると、作品からは二つのアド・バルーンを確認することができる。まず、「空には軽気球がうかんでゐて、百貨店の大売出しの広告文字がぶらさがつてゐた」という部分で、アド・バルーンは初めて登場する。これは、十吉の命の恩人である秋山の行方が分からなくなった場面を語ったものである。時間の推移から、この場面は昭和六年であると推定できる。『日本広告発達史』によると、アド・バルーンは「第1次世界大戦から関東大震災まで」の時期に普及され始めた。そして、昭和初期には「野外広告の真昼の花形」となり、「1935年（昭和10）ころの大阪には、毎日5個ぐらいのアド・バルーンが空に浮かんでいた」とされている。ゆえに、昭和六年に百貨店のアド・バルーンが空に浮かんでいたという作品内の光景は、時代に沿ったものであるといえる。

次に父の納骨後、父の老妻と訪れた「中ノ院の茶店」で、十吉は「季節はづれの古いレコード」曲を耳にするが、そのレコードの歌詞の中に「今日も空には軽気球……」と、二つ目のアド・バルーンが登場している。本文内から判断して、十吉がこのレコードを聴いているのは、昭和十六年八月十日である。「今日も空には軽気球……」という曲は、昭和十一年にヒットした「ああそれなのに」である。この曲に関して、織田は昭和二十年六月、川島雄三宛の書簡で以下のことを書いている。

さいきん「今日も空にはアド・バルーン……」の一句を以つてはじまる「ああそれなのに」という歌を、さる佳人（当年二十才、志賀山流名取）よりならい覚えて、もつぱら口ずさんでいましたが、ついに気持昂じて「アド・バルーン」と題する小説七十四枚書きました。

すなわち織田は、「さる佳人」から習い覚えた「ああそれなのに」を気に入り、この曲を「アド・バルーン」に登場させたのである。

以上の二箇所が、作品内に登場するアド・バルーンの描写である。ここで、昭和十四年五月二十八日の「大阪朝日新聞」の記事を確認したい。そこには、節約強化のために商工省が日本百貨店組合に対し、季節売り出しの中止やアド・バルーンの禁止などの自粛を勧告したことが記されている。つまり、「今」（昭和十六年）の十吉は、以前見ることができた百貨店のアド・バルーンを見ることができないのである。十吉が百貨店のアド・バルーンを見た昭和六年や「ああそれなのに」がヒットした昭和十一年に対し、十吉の「今」の状況が大きく異なっていることは明らかである。作品におけるアド・バルーンの描写が、大阪の変化、つまり「亡び行く大阪」の様子を浮き彫りにしているのである。

作品に描かれる変化は、アド・バルーンだけにとどまらない。十吉の語りには、浜子や玉子と訪れた夜店、奉公先を抜け出して訪れた夜店など、夜店の場面が多数登場する。生まれて初めて夜

店を見た際、十吉はその光景を「夢の世界」と表現している。更に、十吉は夜店に足を運ぶだけでなく、夜店で自らが働くという経験もしている。このように、彼の語りにも多く登場する夜店であるが、その夜店もまた姿を変えているのである。「昭和大阪市史」によると「日華事変が起つた十二年ころには、まだ夜店は今までのように開かれていた」が、「今までの趣をもつて夜店が開かれていたのは大体十五年くらいまで」であるとされている。十吉の語りの中で「今」は昭和十六年であるから、この頃の夜店には以前の賑わいが無くなつていたと推測できる。したがって「今」の十吉は、「夢の世界」を味わうことができない状況に置かれているのである。

更に、作品冒頭部の「その時」に十吉が手にしていた「十銭白銅六つ一銭銅貨三つ」の六十三銭からも、時代の変化を読み取ることが可能である。本文内から判断すると、「その時」とは昭和六年を指す。この時に十吉が手にしていた「十銭白銅」は、大正九年七月に公布・施行された「貨幣法」改正により定められ、昭和八年九月にニッケル貨に変更されるまで用いられた。また、「一銭銅貨」であるが、これは一銭青銅貨を指す。一銭青銅貨は、大正五年二月に公布・施行された「貨幣法」改正により定められ、昭和十三年六月に黄銅貨に変更されるまで用いられた。その後も幾度かの形式の変更を経て、昭和十六年八月の「今」において、十銭と一銭はどちらもアルミニウム貨となっている。つまり、貨幣の形式が変更されたことにより、「今」の十吉にとって

「十銭白銅」や「一銭銅貨」は、過去のものとなつてしまったのである。

「亡び行く大阪」の例として、最後に「灯」を挙げたい。幼少期の十吉は、継母の浜子や新次と訪れた道頓堀で、楽天地を目にしている。楽天地は夜になるとイルミネーションで輝き、人々に楽しまれていたが、昭和五年に取り壊され、その「灯」が輝くことはなくなった。そして昭和十四年十月になると「電力調整令」が公布され、更に同年十二月の「通信省告示第三千六百八十五号」によつて、昭和十五年一月一日からネオンサイン、電飾、広告燈の電力消費が禁止された。これを受け、十吉の「胸を悩ましく揺ぶ」った「通天閣の灯」や「ライオンハミガキの広告燈」は、その輝きを失つた。時代が進むにつれ、あるいは戦争の影響を受け、大阪から「灯」が消えていったのである。

以上の例から、作品内にはかつての「大阪の町町」にあつたものが失われ大阪が変化していく様子、すなわち大谷の指摘した「亡び行く大阪」が描き込まれていることが分かる。しかし、果たして「アド・バルーン」は「亡び行く大阪」が描かれているだけの作品であろうか。「亡び行く大阪」を作品内から確認することは、織田が「あとがき」に記した「大阪惜愛」の言葉をなぞる作業に過ぎない。また、もし「アド・バルーン」が「亡び行く大阪」を書き残すためだけの作品であるならば、十吉が生誕から「今」に至るまでを長々と語らなくても差し支えはない。しかし、既に指摘した通り、「アド・バルーン」は十吉の長々とした

思い出語りによって構成された作品である。十吉の語りの中で登場する「惜愛」に対して、織田の「大阪惜愛」以外の意味を見出すためには、十吉の語りを精細に見ていく必要があるのではない。次節以降、十吉の語りに入れられた「亡び行く大阪」以外の変化を本文から読み取ること、作品における十吉の語りの必然性を探る。

二 大阪の「灯」

十吉の語りにおいて着目すべきことは、「灯」の描写が多いことである。「そこは献納提灯がいくつも掛つてゐて、燈明の灯が揺れ、線香の火が瞬き」、「あのアセチリン瓦斯の匂ひと青い灯。プロマイド屋の飾窓に反射する六十燭光の眩い灯」など、十吉の語りには「灯」に関する言葉が数多く登場している。とりわけ、十吉が浜子や新次と二つ井戸、道頓堀を訪れる場面では、「灯」の描写が一番多く用いられている。「行燈の中がぐるぐる廻るのは走馬燈で、虫壳の屋台の赤い行燈にも鈴虫、松虫、くつわ虫の絵が描かれ」や、「やがてアセチリン瓦斯の匂ひと青い灯が如露の水に濡れた緑をいきいきと甦らしてゐる植木屋の前まで来ると」など、夜店の光景を語る際に「灯」が多く現れている。

ただし、「灯」が語られる場面では、必ずしも「灯」が煌々と輝いているように描写されているとは限らない。二つ井戸へ向かう道中、「燈明の灯が道から見える寺があつたり」と目にしたも

のを語る際に「灯」の描写がいくつかなされているが、その後市場を訪れた際には、「鈍い軒燈の光をあびながら」と、「鈍い」という語が伴われている。また、「市場の中は狭くて暗かつた」という描写もあり、市場の「灯」は、明るく輝かない「灯」として描写されているのである。しかし、その直後に「道はぱつとひらけて、明るく、二つ井戸」と語りが展開されている。「鈍い」、「狭くて暗い」などと表現される市場の「灯」の様子は、単に市場の暗さを表現するのではなく、直後に展開される二つ井戸の明るさを際立たせる効果を狙ったものであると考えられる。ところが、この効果によって「灯」が際立つはずの二つ井戸の場面では、「灯」はもとより「行燈」、「提灯」など、「灯」を直接的に表す言葉を確認することができない。その一方で、「オツトセイの黒ずんだ肉を売る店」や「猿の頭蓋骨や龍のおとし兒の黒焼を売る黒焼屋」など、二つ井戸で目にした店の名前や情報が、十吉の語りの中で細かに挙げられている。「灯」を表す言葉が直接用いられていないものの、店が羅列されることによって、「灯」のある光景を喚起させることに成功した場面となっている。

このような二つ井戸の光景に対し、十吉は「しびれるやうな夜の世界の惱ましさに」「幼い心」をうずかせたと語っており、幼少時の十吉が「灯」のある世界に魅了されたことがうかがえる。また、二つ井戸の次に訪れた道頓堀の様子を、十吉は以下のように振り返っている。

前方の道頓堀の灯をながめて、今通つて来た二つ井戸よりもなほ明るいあんな世界がこの世にあつたのかと、もうまるで狐につままれたやうな想ひがし、もし浜子が連れて行つてくれなければ、隙をみてかけだして行つて、あの光の洪水の中へ飛び込まうと思ひながら、(略)もう道頓堀の明るさはあつといふ間に私の軀をさらつて、私はほうつとなつてしまつた。

十吉は、道頓堀の「灯」を「二つ井戸よりもなほ明るい」世界、「光の洪水」であると表現しており、道頓堀の「灯」がいかに十吉を引き付けるものであるかが伝わる部分となっている。そして、十吉は浜子に「お午うまの夜店」へと連れて行かれる。

さまざまな色彩とさまざまな形がアセチリン瓦斯やランプの光の中に「ごちやごちやと、しかし一種の秩序を保つて並んでゐる風景は、田舎で育つて来た私にはまるで夢の世界です。

「夢の世界」を目の当たりにした十吉は、「夜の蛾のようにこの世界にあこがれてしま」い、その後、次の継母である玉子に連れられて行つた八幡筋の夜店でも、「はじめて見る心齋橋の灯にほうつとなつて」しまふ。加えて十吉は、「それよりも戎橋や太左衛門橋の上から見た川の兩岸の灯に心をそそられた」と語る。

二つ井戸の場面から八幡筋の場面に至るまでの語りからは、大

阪の「灯」、特に夜店の「灯」に魅了される十吉の姿が浮かび上がる。実際に十吉は、十五歳で丁稚奉公に出たがやがて奉公を怠け出すようになったことを振り返り、当時自分を引き付けていた夜店の「灯」の魅力について以下のように語っている。

が、こんな食気よりも私をひきつけたものはやはり夜店の灯です。あのアセチリン瓦斯の匂ひと青い灯。プロマイド屋の飾窓に反射する六十燭光の眩い灯。易者の屋台の上にもちよほんと置かれてゐる提灯の灯。それから橋のたもとの暗がりに出てるる螢売りの螢火の瞬き……。私の夢はいつもさうした灯の周りに暈となつてぐるぐると廻るのです。私は一と六の日ごとに平野町に夜店が出る灯ともし頃になると、そはそはとして、そして店を抜け出すのです。

夜店の「灯」のみならず、「新世界の通天閣の灯」や「ライオンハミガキの広告燈が赤になり青になり黄に変わつて点滅するあの南の夜空」は、十吉の胸を「悩ましく揺ぶ」つた。「灯の空にあこがれ、さまよ」う「想い」を抱えた十吉は、奉公先や仕事を次々と変え、放浪を繰り返す。それだけでなく、初恋の女性である文子への思いを断ち切ることができない十吉は、彼女を追いかけ線路沿いを歩いて東京へ赴く。無事文子に再会できた十吉であったが、迷惑げな彼女を見て、「そんな女心に愛想がつきてしまふ前に」自分自身に愛想を尽かす。そして、文子から大阪までの

旅費を「うつつかり貰つてしまつた」十吉は以下のことを考える。

しかし、私は旅費を貰ひながら、大阪へ帰つたら、死ぬつもりでした。そんなものを貰つた以上、死ぬより外はもう浮びやうがない。もう一度大阪の灯を見て死なうと思ひました。

自分自身に愛想を尽かした十吉の心を繋ぎ止める存在として、大阪の「灯」が登場している。死のうと決心した際に心残りになるほど、大阪の「灯」は、当時の十吉にとって重要視されているのである。また、この作品には石山、豊橋、静岡、東京など大阪以外の地名が登場するが、それらの場所に関する語りがなされる際、「灯」に関する描写は殆ど見られない。すなわち、十吉にとって「灯」そのものが重要なのではなく、大阪の「灯」こそが彼の心の支えとなるのである。

さて「もう一度大阪の灯を見て死なう」と決心した十吉は東京を離れ、大阪・中之島公園に到着する。川岸を眺める十吉の語りを見ると、「その料理場では鈍い電燈の光を浴びた裸かの料理人が影絵のやうにうごめいておました」と、「灯」の描写がなされている。そして「灯」を見たことで「にはかに生への執着が甦つて来ました」と語っていることから、大阪の「灯」に対する十吉の執着を、ここからも読み取ることができる。

しかし、この場面から彼の語りの中での「灯」は変化を始める。十吉が中之島公園でばんやり過ごしているうちに、「支那料

理屋の客席の灯が消え、歯医者の方の二階の灯が消え」と、「灯」が消えて行くのである。「灯」が消える描写は、十吉の語りにおいてこの部分が唯一である。この部分からのち、大阪の「灯」について語られる箇所は殆ど見られない。作品の終盤、十吉が父の家を訪れた際に「行燈」が登場するものの、これまでの描かれ方は様子を異にしている。

その家の軒には「おめかし処」と父の筆で書いた行燈が掛つてゐたのだが、二三年前から婆さんの右の手が不随になつてしまつたので髪結びもよしてしまつたらしい。

父の老妻が「髪結びもよし」たことは、すなわち行燈に「灯」がともらないことを示す。中之島公園で「灯」が消えた後、やはり大阪に「灯」がともる描写は見られないのである。前章で確認した「亡び行く大阪」のような「灯」の変化のみでなく、十吉の語りにおける表現としての「灯」もまた、変化しているのである。

「灯」の変化に加え、その「灯」に魅了されていた十吉の行動も変化をしている。「さう言へば、たしかに私の放浪は生れた途端にもう始まつておました……」という語りからも分かる通り、十吉の放浪は、生まれてから七歳で父親の元へ戻るまでの間、たらい回しに遭つたことから始まる。そして「十五の歳から二十歳の歳まで十年の間、(略) あとはどんな色の紐の前掛をつけたの

やらまるで覚えがないくらゐ」奉公先を転々としたことにより、十吉は父から勘当されている。その後も職を転々としたり、「放浪への郷愁」から東京まで歩いて行つたりするなど、作品には放浪を繰り返す十吉の姿が描き込まれている。

父から不良扱ひされ勘当までされた十吉であるが、父と思ひがけない再会を果たした後、父の暮らしぶりを見た彼は、「私はこの父と一緒に住んで孝行しようと思つた」と決意し、父とその老妻と共に生活をする。二年の共同生活の後、父は他界したが、今度は「ちよこちよここと随いて来る父の老妻の皺くちやの顔を見ながら、ふとこの婆さんに孝行してやらうと思つた」と、血のつながらない「この婆さん」に対しても孝行を思い立つている。親孝行をする十吉からは、放浪を繰り返していた頃の十吉の姿はうかがえない。

次に見られる行動の変化として、貯金が挙げられる。「六十三銭しか持ち合せがなかつた」ために東京まで徒歩で赴いた十吉が、昭和六年から「今」に至るまでの約十年間貯金し続けている点は、彼の行動の変化を示す一例であるといえる。なお、このような変化が描かれる一方で、紙芝居屋や造船所の倉庫番、病院の雑役夫など、十吉の職はいくつか変わっており、これは一見すれば彼に放浪が根付いていると捉えられるかもしれない。しかし、職を転々としながらも、「禁酒貯金」や「秋山さん名義の貯金」を維持するために働くという行為が継続されていることは、注目に値する。車の先引きを辞めた理由は亀やんの死であつたし、父

親が「私の軀についてゐる葉の匂ひをいやがつたので」病院の雑役夫を辞めたなど、仕事を辞めるにも理由が存在している。貯金を開始した十吉からは、丁稚奉公やその後仕事を転々としていた頃の「少し飽きて来ると、もう居たたまれなくなつて、奉公先を変へてしまふ」といった様子が見られない。放浪を繰り返してきた十吉は、行動という点において、作品内で変化しているのである。

ここで、大阪の「灯」と十吉の放浪との関係について考えてい。「今」の十吉は、「もう私には大した望みもない。私を誘惑する大阪の灯ももうすつかり消えてしまひ、却つて気持が落ち着いてゐる」と語っている。この語りからは、大阪の「灯」が十吉を誘惑する存在であつたということが浮かび上がる。そしてそれと同時に、「灯」が自分を誘惑する存在であつたことを「今」の十吉が自覚していることも明らかとなる。自分を誘惑する大阪の「灯」が「すつかり消えてしま」つた「今」、十吉は望みを失つたものの「却つて気持が落ち着いてゐる」状態であり、その彼から放浪の様子はうかがえない。「灯」の表現が変化するにつれ、十吉の行動も変化しているといえる。つまり、大阪の「灯」と十吉の行動とは相関関係にあるのである。

では、これら二つの変化はどこで生じるのであろうか。実はその変化の生じる場面こそが、「灯」の消えた中之島公園の場面なのである。放浪を繰り返していた十吉は、消灯を目にした中之島公園にて秋山と出会い、その後貯金や親孝行をするようになる。

つまり、二つの変化は、同じ地点で生じているのである。それだけでなく、中之島公園の場面を軸として他にも変化しているものがある。それは、作品を構成する十吉の語りである。以降、十吉の語りの変化が「灯」や行動の変化とどう関わっているかを明確にするため、「灯」や行動の変化の軸である中之島公園の場面を転換点とし、転換点以前の部分を作品前半、転換点以後を作品後半として、引き続き論を進める。

三 十吉の放浪と語り

幼少期の思い出における十吉の語りは、微細な点にまで渡っている。例えば冒頭では、「生れた時のことは無論おぼえはなかつたが」、「よくはおぼえてゐないが」などと言いながらも、生まれて間もない頃のことを、あたかも記憶しているかのように事細かに語っている。生まれてすぐたらい回しに遭った「不景気な話」を、「子供の頃でおぼえもなし、空想をまじへた創作で語る以上、出来るだけ面白をかくし脚色してやりませう」と諧謔を交えて語る十吉であるが、その理由として「そんな語り口でしか私には自分をいたはる方法がなかつたと、言へば言へないこともない」と述べている。生まれて間もない頃のことを語る十吉は、その「不景気な話」を「下司つばい語り口」で語ることによって、自分自身を慰撫しているのである。

そして、十吉の語りの中で特に事細かに語られているのが、千

日前や道頓堀などを始めとする、十吉が訪れた夜店の場面である。彼は、自分が目にした店や通った道などの光景に関して、非常に詳しい語りを展開してみせる。

おもちゃ屋の隣に今川焼があり、今川焼の隣は手品の種明し、行燈の中がぐるぐる廻るのは走馬燈で、虫壳の屋台の赤い行燈にも鈴虫、松虫、くつわ虫の絵が描かれ、虫売りの隣の蜜垂らし屋では蜜を掛けた祇園だんごを売つてをり、蜜垂らし屋の隣に何屋がある。と見れば、豆板屋、金米糖、ぶつ切り飴もガラスの蓋の下にはいつてをり、その隣は鯛焼屋、(略)

右に挙げた例の他にも、笠屋町の町並みや、浜子の次に継母となった玉子に連れられて行った八幡筋の夜店、平野町の夜店などについて、十吉は細々と語っていく。精細に語られる夜店の場面において「灯」の描写が非常に多く見られることは、既に指摘した通りである。「こと大阪の話になると、やはりなつかしくて、つい細細と語りたくて……」と述べる「今」の十吉からは、幼少期の大阪での思い出やその時見た「灯」について詳しく語りたいたい心情がうかがえる。実際に、作品前半では、「しびれるやうな夜の世界の悩ましさに、幼い心がうづいてゐた」や、「もうまるで狐につままれたやうな想ひがし」など、当時の心境を詳しく語る十吉の姿を確認することができる。

幼少期に限らず、奉公先での思い出においても、十吉の語りは細部にまで及ぶ。「朝はお粥に香の物、昼はばんざいといつて野菜の煮たものか蒟蒻の水臭いすまし汁、夜はまた香のものにお茶漬だつた」など、奉公先で食べた物やそこでの習慣について細かな語りが展開されており、ここでも過去の思い出の詳細を語りた十吉の姿を読み取ることが可能である。その後、十吉は父親に勘当され職を転々とするが、そのことを語る際も十吉の語りの姿勢は変わらない。しかし、「灯」の描写や十吉の行動と同様、十吉の語りは転換点付近から変化を見せるのである。東京で自分自身に失望し、「もう一度大阪の灯を見て死なう」と決心をした際の心情を、十吉は以下のように語っている。

その時の気持はせんさくしてみれば、随分複雑でしたが、しかし、今はもうその興味はありません。それに、複雑だからといつて、べつに何の自慢にもならない。先を急ぎませう。

作品前半で当時の心境を詳しく語っていた十吉の姿とは異なり、転換点での十吉は、「その時」の気持ちを探追いせず、むしろ先を急ごうとしている。作品前半の十吉は「その時のことを、少し詳しく語つてみませう」と、過去を語ることに対して意欲的であった。しかし、「先を急ぎませう」と語った以降の十吉は、細部まで語ることをせず「人生紙芝居」の話の筋に沿った淡泊な語りを展開していく。作品が進むにつれ、十吉の中で、語りに対

する姿勢が変化していくのである。そのような変化の理由として、十吉は転換点の直前に次のことを述べている。

さて、これからがこの話の眼目にはいるのですが、考へてみると、話の枕に身を入れすぎて、もうこの先の肝腎の部分で詳しく語りた熱がなくなつてしまひました。(略)しかしかうなればもうどうにも仕様がな、駈足で語らして貰ふ外はありますまい。

この後、十吉は周囲から「人生紙芝居」と言われるようになった経緯を淡々と語っていく。この語りの流れから考えると、彼の語りの「肝腎の部分」が「人生紙芝居」の部分の指していることは明らかである。しかしながら、十吉はその部分について「詳しく語りた熱」を失っているのである。また、十吉は「私のこの話がもしかりに美談であるとすれば、これからが美談らしくなる訳ですが、美談といふものは凡そ面白くないのが相場のやうですから、これから先はますますご辛抱願わねばなりませんまい」や、「現在の自分を振り返つてみても、別に出世双六と騒がれるほどの出世ではない」などと語ることで、「人生紙芝居」の話に対して否定的な姿勢を取り続ける。この否定的な姿勢からもまた、「詳しく語りた熱」を失った十吉の様子がうかがえる。加えて十吉は、「今」の自分に対しても「もう私には大した望みもない」といった消極的な発言をしている。「人生紙芝居」の話だけ

でなく、「今」の自分について語るにも熱を失っているのである。また、十吉の語りは「人生紙芝居」の話に移る以前の方が細かく、分量としても長い。尻すばみなこの語り方からも、「詳しく語りたい熱」を失っている十吉の様子をうかがうことができ。十吉の語りは転換点付近で明らかに変化しており、更にその語りが「今」に近付くにつれ、十吉の「詳しく語りたい熱」は失われていく。つまり、十吉の語りの変化は、大阪の「灯」の変化や行動の変化と極めて強い関連を持っているのである。

変化を伴う十吉の語りは、実は作品冒頭の「その時、私には六十三銭しか持ち合せがなかったのです」から始まっている。冒頭で「その時」と始まる語り出しは唐突であり、また冒頭部分での十吉の語りからは、「その時」がいつを指すのかを把握することができない。そして六十三銭を手に文子という人物に会うため東京まで歩いて行くことが語られているものの、文子がどういう人物なのか、またなぜ彼女に会うために東京へ行くかとしているのかについて、そこで語られることはない。更にこの後、東京行きの一因として挙げた「一つには放浪への郷愁でした」という部分における、「放浪への郷愁」についての説明がなされることもなく、十吉の語りは続いていく。それどころか十吉は、その「放浪への郷愁」という言葉から、「さう言へば、たしかに私の放浪は生れた途端にもう始まつておました……」と、生誕時の思い出話へと語りを脱線させていくのである。脱線した彼の語りは、生誕時から幼少期、丁稚奉公や勤当などを経て文子に再会した頃まで

長々と続く。その語りの中には、以下のような「灯」の描写を認めることができる。

私ははじめて見る心齋橋筋の灯にぼうつとなつてしまひましたが、しかしそれよりも、戎橋や太左衛門橋の上から見た川の兩岸の灯に心をそそられた。(略)そしてどちらの背中でも夏簾がかかつてあて、その中で扇子を使つてゐる人人を影絵のやうに見せてゐる灯は、やがて道頓堀川のゆるやかな流れにうつつてゐるのを見ると、私の人一倍多感な胸は躍るのでしたが、(略)

この時十吉が見た道頓堀川の水面には「灯」が映っており、十吉は「人一倍多感な胸」を躍らせている。この部分においても、「灯」に魅了される十吉の姿を確かめることが可能である。そして、二十八歳の頃、十吉は文子に会うために白浜から大阪へと戻ったが、彼女は東京に行つた後であった。これを受けて、十吉が東京へ行くことを決心するのが、以下の場面である。

私は肝をつぶし、そしてカツとなりましたが、その腹の虫を押へるために飲んだ酒と花代で、私が白浜から持つて来た金は殆んど無くなつてしまひ、ふらふらと桔梗屋を出たのは、あくる日の黄昏前だつた。私は太左衛門橋の欄干に凭れて、道頓堀川の汚い水を眺めてゐるうちに、ふと東京へ行かうと

思つた。

ここでは、時間帯が「黄昏前」であることが記されており、更に「灯」の描写は見られない。ゆえに、この時の道頓堀川の水面には「灯」が映っていないと考えられる。大阪の「灯」に魅せられ続けた十吉がその場所を離れ、東京へと行く決意をする重要なこの場面では、「灯」の描写を確認することができないのである。大阪を離れる際には「灯」について何も言及せず、死を決意して東京から大阪へ戻る際には大阪の「灯」のことを思う十吉は、自分自身の心境変化と大阪の「灯」とを連関させて語っているのである。

そして、十吉が「ふと東京へ行かうと思つた」場面の直後、作品冒頭部分で語られた「その時」が、もう一度登場するのである。「その時、私には六十三銭しか持ち合せがなかつたのです」から「一つには放浪への郷愁でした」までの語りは、冒頭部分の語りと内容において一致しており、その直後には東京までの道中について語られている。そして、「人生紙芝居」の話へ続き、「今」の自分についての語りで「アド・バルーン」は締めくくられている。

ここで再確認したいのが、「アド・バルーン」は十吉の語りによって進められているということである。彼の語りの中で同一の内容が二度登場することは、どのような効果を生み出しているのであろうか。同一内容の言い回しの間に挟まれた部分を確認する

と、そこでは十吉の思い出話が長々と語られている。彼の語りにとって、「肝腎の部分」が「人生紙芝居」の話であることは指摘した通りである。したがって、十吉の長々とした思い出話は「肝腎の部分」から脱線した語りであるといえる。

ところが、長々とした思い出話がなされることによって、読者は、十吉の「放浪のならばは」が生まれた頃から染み付いていることや、文子と十吉の関係、更に十吉が持つ「灯」へのこだわりなど、十吉がいかなる人物であるかを知ることができるのである。十吉に関する知識を得た上で、「その時、私には六十三銭しか持ち合せがなかつたのです」から「一つには放浪への郷愁でした」までの部分がもう一度語られると、冒頭では見えてこなかつた十吉の姿が浮かび上がるようになる。すなわち、語りの脱線によって十吉のことを理解することで初めて、なぜ彼が六十三銭しか持っていないのか、文子という女性が誰であるか、彼を東京へ赴かせた要因である「放浪への郷愁」とはどのようなものかなどが明確になるのである。それだけでなく十吉自身も、一度語りを脱線し、生まれてから「その時」に至るまでの自分を語ることで、自分を東京へ行かせた要因が何であったのかを確認しているのである。「人生紙芝居」の話を語ろうとする十吉の語りの中に、語りの脱線が加えられることによって、大阪の「灯」に対する表現や十吉の行動、彼の語りが変化していくこと、更にそれらが重層的な構造を成していることが明らかにるのである。

おわりに

以上、誕生から「今」に至るまでを語る十吉の語りを読み解くことで、大阪の「灯」、十吉の行動、語りの変化を論証してきた。大阪の「灯」の表現が転換点で変化すると、十吉の行動やそのことを語る十吉の語りぶりも同様に変化していることから、三つの変化は互いに強固な連関関係にあるといえる。

では、その変化によって何が浮かび上がるのであろうか。作品前半の十吉の語りは非常に細かく、そこでは大阪の「灯」の描写が多く見られた。作品前半での思い出を詳しく語る理由として、「今」の十吉は、「一つには何といつても私には大阪の町町がなつかしい、今となつてみれば一層なつかしい、惜愛の気持」があるためだと語る。この部分によつて、十吉の感じた「惜愛」やなつかしさが、大阪の「灯」が見られた頃の「大阪の町町」から生じていることが明確となる。更に、十吉は「私を誘惑する大阪の灯ももうすっかり消えてしまひ」と語り、「今」の大阪では「灯」が消えてしまつていゝことを明かしている。大阪の「灯」が消えることは、作品中で十吉が「亡び行く大阪」の一例を目の当たりしている状況を表すといえる。それだけでなく、大阪の「灯」が十吉自身の心境変化と深く結びついていることを踏まえて考えると、「灯」に魅了され放浪を繰り返した十吉が過去の姿となること、その象徴として、大阪の「灯」の消失を捉えることが可能

である。

十吉は、大阪の「灯」が消えたことで「却つて気持が落ち着いている」とする一方で、「もう私には大した望みもない」と語っている。「今」の自分がいくら世間から「人生紙芝居」と賞賛されても、十吉にとつては「望み」のない存在としか感じられない。そして、「大した望みもない」十吉は自分を振り返り、「大阪の町町」の変化だけでなく、「今」と過去との自分自身においても変化があると気付くことで、過去の自分自身に対して「惜愛」の情を沸かせるのである。

つまり、十吉の語りの中で見られる「惜愛」とは、単に「今」では見ることのできない過去の「大阪の町町」に対する感情だけではなく、「今」の十吉が自分の過去を振り返ることで、「今」の自分には見られない過去の自分の姿に気付いた時に沸く感情も含めて形成されたものである。そして十吉は、自分の過去を振り返りながら細部まで語ることによつて、自分自身と「大阪の町町」、及び大阪の「灯」とがいかに密接に関わり合つてきたかを確かめているのである。

注

(1) 「新文学」第三卷第二・三号（全国書房、昭和二十一年三月）。

(2) 織田作之助『世相』（八雲書店、昭和二十一年十二月）。

(3) 青山光二「解説」（織田作之助『夫婦善哉』、新潮社、

平成十二年九月)。

(4) 織田の執筆動機を軸とした論として、青山光二「解説」

(前掲)の他に、河原義夫「織田作之助の世界 逆説か、

反逆か」(河原義夫編著『織田作之助研究』、六月社書房、

昭和四十六年五月)がある。

(5) 「アド・バルーン」における文体に着目したものとして

は、宇野浩二「作家と作品」(「人間」第二巻第四号、鎌倉

文庫、昭和二十二年四月)、杉山平一「織田作之助君を偲

ぶ」(織田作之助選集附録「第二号、中央公論社、昭和二

十三年三月)、河原義夫「織田作之助の世界 軽佻派とい

う作之助」(織田作之助研究、前掲)などがある。

(6) 以下、本文引用は全て初刊『世相』(前掲)による。本

文決定に関しては、異同に触れておく必要がある。初出

「新文学」(前掲)では、「小説の中に出て来る『私』とい

ふ一人称は、往往にして作者自身のことを指すけれども」

から初出雑誌十七行分に渡る、作者の介入と思われる部分

が存在している。しかし、初刊『世相』でこの部分は削除

され、現在『織田作之助全集』第五巻(青山光二等編、講

談社、昭和四十五年六月)、『定本織田作之助全集』第五巻

(文泉堂書店、昭和五十一年四月)などで確認できる「アド・

バルーン」の形に整えられた。また、本稿で重要な語

句となる「惜愛」という言葉に関して、『織田作之助全集』

第五巻(前掲)、『定本織田作之助全集』第五巻(前掲)な

どでは「愛惜」と表記されているが、この異同がどういつた経緯で起こったのか明確ではない。よって本稿では、織田が生前最後に目を通したであろう「アド・バルーン」が収録されている『世相』(前掲)から本文を引用した。

(7) 初出「新文学」(前掲)末尾には「(二〇・六・一〇)」

と記されている。佐藤秀明は『《解説》可能性の『織田

作』(織田作之助『六白金星・可能性の文学 他十一篇』、

岩波書店、平成二十一年八月)において、この「(二〇・

六・一〇)」が「摺筆の日」であることを指摘している。

(8) 昭和二十年四月六日付の杉山平一宛書簡には「大阪小

説の題『鷹治郎横丁』というのは少し軽すぎるだろうか」と

書かれている。この「鷹治郎横丁」は、同年六月十八日

付の同一宛書簡において「『軽気球』という題で大阪特輯

七十四枚かいた。『雁治郎横丁』よりはましな題かもしれ

ぬ」と記されていることから、「アド・バルーン」を指す

と考えられる。また、同年五月五日付の杉山平一宛書簡で

は「新文学の小説まだ三枚しか出来ず弱つています」と記

されているが、右に挙げた六月十八日付の書簡からは完成

の様子がうかがえる。注(7)の指摘は、これらの書簡か

らも裏付けることが可能である。ゆえに、本稿においても

摺筆の時期を昭和二十年六月十日とした。なお、書簡は全

て『定本織田作之助全集』第八巻(文泉堂書店、昭和五十

一年四月)より引用した。

- (9) 本稿では『大阪市の歴史』（大阪市史編纂所編、創元社、平成十一年四月）の資料「大阪大空襲一覽（昭和20年）」に示されている「大空襲とはB29百機規模以上による爆撃を指す」という定義に即して、「大空襲」という言葉を用いた。
- (10) 「B29約九十機夜間大阪地区を盲爆」（『朝日新聞』昭和二十年三月十五日刊）。
- (11) 「第七章 大阪の近代」（『大阪市の歴史』、前掲）。
- (12) 「大阪大空襲一覽（昭和20年）」（『大阪市の歴史』、前掲）によると、第二次大空襲が昭和二十年六月一日、第三次大空襲が同年六月七日にあった。
- (13) 昭和二十年三月十四日の大空襲直後、当時日本橋に住んでいた長姉タツとその夫・竹中国治郎が大阪府南河内郡野田村（現・大阪府堺市東区）の織田作之助宅へ寄寓したことが、関根和行『資料織田作之助』（三秀社、昭和五十四年一月）に記されている。
- (14) 大谷晃一『織田作之助——生き愛し書いた』（沖積舎、平成十年七月）。
- (15) 「第十二章 大坂焼亡——終戦前後——」（『織田作之助——生き愛し書いた』、前掲）。
- (16) 秋山と会ったのは「ちやうど満州事変が起つた年」で、「三月ばかり」経った頃、秋山が行方不明になることから、昭和六年だと考えられる。

- (17) 『日本広告発達史』上巻（内川芳美編、電通、昭和五十二年七月）。
- (18) 「第三期 第一次世界大戦から関東大震災まで 第3章 雑誌広告およびその他の広告の発展」（『日本広告発達史』上巻、前掲。執筆者は内川芳美。）では、「アドバルーンが普及し始めるのもこの『第三期』である」と記されている。
- (19) 「第四期 関東大震災から日中戦争まで 第3章 雑誌広告の確立とその他の広告の発展」（『日本広告発達史』上巻、前掲）。引用箇所執筆者は内川芳美。
- (20) 『新版日本流行歌史』上巻（古茂田信男・島田芳文・矢沢寛・横沢千秋編、社会思想社、平成六年九月）。
- (21) 昭和二十年六月三十日付川島雄三宛書簡。引用は『定本織田作之助全集』第八巻（前掲）による。
- (22) ただし、『新版日本流行歌史』上巻（前掲）によると、この曲の正しい出だしは「空にゃ今日もアドバルーン」であり、本文とは少々異なっているが、織田が「ならない覚え」たとしているところから、正しい歌詞を知らなかったのではないかと推察する。佐藤秀明『解説』『可能性の織田作』（前掲）でも、「今日も空には軽気球……」という作中に流れる流行歌は、「空にゃ今日もアドバルーンが正しい」と指摘されている。
- (23) 「百貨店共同仕入れ？ けふ自肅強化の評定」（『大阪朝

日新聞」昭和十四年五月二十八日日刊)。

(24)「第四章 商業 第三節 小売商業 第二款 商店街及び百貨店」(「昭和大阪市史」第四卷、大阪市役所編・発行、昭和二十八年三月)。

(25)「御即位の御大礼」の三年後に白浜で文子と再会したと、徒歩で東京へ行った後に秋山と出会ったのが昭和六年であること(注(16)を参照されたい。)を踏まえ、昭和六年とした。

(26)「法律第五号」(「官報」第二三九六号、印刷局、大正九年七月二十七日)。また、「勅令第三百三十四号」(「官報」第二四二二号、印刷局、大正九年八月二十七日)によって、十銭白銅貨の形式が定められた。

(27)「法律第五十八号」(「官報」第二〇〇二号、内閣印刷局、昭和八年九月一日)及び「勅令第二百三十二号」(「官報」第二〇〇二号、前掲)。

(28)「法律第八号」(「官報」第一〇六七号、印刷局、大正五年二月二十四日)。また、「勅令第三十五号」(「官報」第一〇九六号、印刷局、大正五年三月三十日)によって形式が定められた。

(29)「法律第八十六号 臨時通貨法」(「官報」第三四二二号、内閣印刷局、昭和十三年六月一日)及び「勅令第三百八十八号」(「官報」第三四二二号、前掲)。

(30)「勅令第百十三号」(「官報」第三九六六号、内閣印刷

局、昭和十五年三月二十八日)にて十銭アルミニウム貨の形式が、「勅令第七百三十四号」(「官報」第三五七一号、内閣印刷局、昭和十三年十一月二十九日)にて一銭アルミニウム貨の形式が定められており、「今」の十吉はこれらの形式の貨幣を目にしていると考えられる。

(31)本稿では、「通天閣の灯」や「道頓堀の灯」など、「灯」という言葉が直接用いられている言葉の他に、「献納提灯」や「ランプの光の中」、「螢火の瞬き」など灯や光に關するものは全て「灯」とみなし、論を進めている。

(32)「大阪近代史話」(「大阪の歴史」研究会編、東方出版、昭和六十年十月)。同書「第四章 大正デモクラシーと庶民生活——大正期の大阪—— 55新世界と楽天地」(執筆者は小林章。)には「イルミネーションに飾られた円塔をぐるぐる回って登っていくと大阪市内が見おろせるなど、大人も子供も楽しめる不夜城の観があった」と記されており、楽天地の「灯」が千日前の夜を彩ったことがうかがえる。

(33)「勅令第七百八号 電力調査令」(「官報」第三八三七号、内閣印刷局、昭和十四年十月十八日)。

(34)「通信省告示三千六百八十五号」(「官報」第三八八六号、内閣印刷局、昭和十四年十二月十八日)。「電力調整令 第三条第一項ノ規定ニ依ル電力ノ消費ノ禁止ニ関シ左ノ通定メ昭和十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス」として、ネオン

サイン、電飾、広告燈、屋外用投光器などの電力消費禁止が発表されている。

(35) 十吉と秋山は「昭和六年八月十日の夜」に出会っている。そして「その年も押しつまったある夜」、十吉は禁酒会員となり、その後一円貯金を始めている。よって、昭和六年末頃から貯金を始めたと考えられる。

(36) 「十銭白銅六つ一銭銅貨三つ」と「十銭白銅六つ、一銭銅貨三つ」や、「が、むかふ見ずは」と「が、向ふ見ずは」など、冒頭部分と表記の面で異なっているため、完全に一致しているとは断言できないが、内容の面では二つの「その時」で始まる場面に相違は無い。

附記

引用文における旧字体は全て新字体に改めた。

本稿は、平成二十二年六月六日に行われた第五十四回立命館大学日本文学会大会での発表内容に、加筆訂正をしたものである。

(ひぐち・あやの 本学博士前期課程)